白金薮

9月号

ひたち海浜公園の写真（朝日新聞 9/1）

平成 30 年 9 月発行　　第９０号

定例句会（毎月第三金曜日　アビスタ会議室）

十月十九日（金）第四正午～三時：山椒の実、下り簗
十一月十六日（金）第一コビアン大テーブル：芭蕉忌、鼬
十二月二十一日（金）第四正午～三時：白鳥、枯芦

兼題句参考句　十月十九日分（山椒の実、下り簗）

下り簗だだ漏れ熊野川通る　山口誓子
水に筋金下り簗経たる後　〃　〃
はじかみを切りし刃物も厨の夜　〃
墓守や日々に色づく山椒の実　古川芋蔓

月例句会報（'18／9／21　9名欠3）

上高地峡を秋燕高く飛ぶ　光成高志
無花果を両手に受ける丁度一杯
透き垣を越えて並んで蓼の花
ジンジャーの花の半ばは萎れをり
ベランダの手すりのくもり露微塵
窓の蛾や折角生きて夜業せむ　増田陽一
青鮫の句碑ある寺に露繁し（真栄寺）
日暮れては皮膚鹹しアンタレス
蜘蛛などを宥し老年健やかなり
秋燕の去りて沼辺の芦静か
函嶺の空の帰燕の幽かかな　松村幸一
帰燕みな細見を尽くす富士の空
子規の忌の乗せて刺身のごはんかな
骨壺の中に露けく妻が居る
大利根の一茶ぶりなる横しぐれ
秋深し組み立ててをり能舞台　光　みち
電線や終に一羽の秋燕
ひと匙の水飴に似て芋の露
換気扇より夕立の雨の音

雨傘に毛虫の落つる音すなり

稲田ゆくじゃんけんぽんを繰り返し
露しとど立喰蕎麦を食ひながら
蜘蛛の囲に雁字搦めの疣毟
実篤の村にターンと威銃
噦り鳴く御苑生れの法師蝉

佐藤宏之助

産土の庇となりぬ秋燕
秋燕平成の空置き去りに
秩父嶺に兜太のかほや秋燕
露草を励みとしたる散歩かな
銀河鉄道のひかり遠のく露月夜

仲本興正

初ものは長生きすると秋刀魚買ふ
金木犀香りで気づく葉の陰に
露の玉ちりばめ揺れる蜘蛛の巣や
運動会喚声沸いてバトンパス

浅野正美

秋燕巣はそのままに飛び去りぬ
草の露ベンチに残る子供靴
秋燕空地に残る草揺れて
多摩川を渡って行けり秋燕
転がりて輝いてをり芋の露
包丁を持つ手に止まる蚊の名残り

田宮敦子

露はねて肩幅余るランドセル
曼殊沙華こんなところに二三株
深々と理髪の椅子に秋燕
燕帰る南の島の日本語
色剥げる犬の鼻面露つぶら

飯田孝三

醤匂ふ駅に見送る帰燕かな
妹病めりふじなでしこに露の玉
柵うちに一畝蛇笏の芋の露
膝に乗る亡妻の愛猫つゆけしや

中川素子

水車小屋に終の朝顔高く咲く　　磯目健二

露の草筌を仕掛けたる野川かな
露律河原に立てば遠き山
露の朝猛暑は夢の如くなり
沼の秋燕等去りて空深し
子燕も南の空に消えにけり　　武者昭七

フィルムを巻き戻したる夏の末
あの峠を越えて来たのねと肩を寄せ
旅人が一人だけ居る一里塚（信州追分宿）
鳴きかはす鳥の名知らぬ探鳥会
椎の花の香りゆかしみ木曽の旅　　光成高志

一句鑑賞　　敦子

包丁を持つ手に止まる蚊の名残り

夏の蚊の名残りである秋の蚊が台所まで入って来て包丁を持った手に止ったのを打とうにも包丁の手では危ないしと思いつつちょっとみたのです。その間を書き留めてある生活感のあるいい句です。

燕帰る南の島の日本語　　孝三

日本に生まれて南洋の島に帰る燕さんよ、どうか帰ったらぺちゃくちゃゝゝゝ日本語をしゃべってくれよ、燕雀いずくんぞ・・とかなんとか言わないから。昔の一番発展した一瞬の日本を幻視して帰燕に日本語をとり囃した知的な俳句です。

日暮れては皮膚鹹しアンタレス　　陽一

今年の殺人的な炎暑の一日の感慨をアンタレスと取り合わせて述べられたのでしょう。日暮れて汗のかいた皮膚をふっと嘗めると鹹（しおから）い味がしたのです。窓の外にはアンタレスが赤く々々見えたのです。S字カーブのさそり座ははっきりとは見えなかったがその主星であるアンタレスは認識できるのでした。この星を太陽に持ってくると火星の軌道あたりまで達するという超巨星ですが、その一生の終りに近い老年の星であることを作者は知っているに違いありません。

醤匂ふ駅に見送る帰燕かな　　素子

醤は味噌のことで絞ったものが醤油である。私はこの半年野田市に通って源氏物語を聴講したが、いつも老舗の漬物屋に寄って醤を買うのを楽しみしていました。子供の頃の天道味噌によく似ていたからです。その香りも懐かしい。野田市駅ではすでにその匂いがするのでしょ

う。そこで空の帰燕の群れに遭遇して、さようならと心に言って見送ったのです。いい所でいいものを見ました。

一句鑑賞　　磯目健二

秋燕巣はそのままに飛び立ちぬ　　正美

人家の軒下に巣作りするなど燕は身近な鳥。春夏は育雛の様子まで見られた巣が、秋の訪れとともに親子ともども南へ去って空虚となる。親近感が深いだけ別離の寂寥感は深いのである。

銀河鉄道のひかり遠のく露月夜　　興正

天空を仰げば明月は照り映えて、その分天ノ川は空の奥へ遠のき、皓々たる月光が露めく地上を照らしている。まさに月と星の光の交響楽。広大な天地の眺めにメルヘンの余韻をも感じさせる句である。

膝に来る亡妻の愛猫つゆけしや　　素子

亡妻がこよなく愛した猫が、今しも外歩きから帰り膝へすり寄って愛撫をせがむのだが、その体は露の湿気を帯びていた。「つゆけし」は悲愁の意を帯びる形容詞として、亡妻への切実な思慕の心とも重なる。

あの峠越して来たのねと肩を寄せ　　昭七

背後の山嶺を麓から見上げ、その峻嶮さと山越しの難儀を改めて噛みしめる二人連れ。手を取り合って山並みの向こう側から越えてきた感慨には、単なる山行ではない訳が秘められていた。そんなドラマチックなシーンを髣髴させる、小説風仕立ての無季句。

燕帰る南の島の日本語　　孝三

秋になると燕は北回帰線以南の島々へ帰って行く。戦前は南洋群島は日本の信託統治領で多くの日本人が移住し、原住民も日本語教育を受けていた。戦後は観光で多くの日本人が訪れている。南洋では現地語に溶け込んだ戦前の残影を含めて日本語を耳にすることが少なくない。その日本語を縫って日本帰りの燕が飛ぶ。

電線や終に一羽の秋燕　　みち

盛夏には群れ飛んでいた燕だったが、秋の訪れとともにいつしか見えなくなって、今やたった一羽、頭上の電線に止まっている。それも旅立ち寸前に思われる。帰燕の頃のうら寂しい情景である。

色剥げる犬の鼻面露つぶら　　孝三

犬は異臭を感じたか朝露がしとどな草葉の中に跳び込んだが、勢い空しく戻ってきた。見ればその濡れた鼻面には玉の露がぶら下っていた。老犬の剽軽な表情と美しい白露の取り合わせが面白い。

一句鑑賞　　増田陽一

燕帰る南の島の日本語　　孝三

燕は日本と南の島を往復する。南の島の日本語、と言

っても旅行者のそれではなく、東南アジアに長く残存した日本兵を思う。つい先月も孤島で悲壮なひとり戦争を続けた小野田寛郎をテレビで見た（嘗て真栄寺で氏の講演を聞いたことあり。）そんな例がまだ他に多くあってもおかしくない。現地に余生を送った元兵士の例は多い。そんな思いを誘って絶妙なのがこの「南の島の日本語」という簡潔な言い回しである。燕は望郷の思いを祖国に伝えるものの如くである。（小生タイ国で3月始めの夜のバンコクで電線に集まる何万とも知れぬ燕を見た。現地の人が「あれは日本の燕ですよ」と言ったのだった。）

骨壷の中に露けく妻が居る　　幸一

妻の骨壷がまだ身辺にあって、朝夕眺め暮している。そして秋冷の季節を迎えたが、亡き妻は壷の中に生前のように「居る」と観じたところ、「露けく」の季語が生きて深い悲しみと同時に到達した或る安らかさが伝わる。

包丁を持つ手に止まる蚊の名残り　　敦子

人は包丁を持ち生きるために何かを料理しようとしている。まな板の上にあるのは生魚かも知れない。するとまたその手に秋の蚊が、これも自らのいのち生きようと血を吸いに来るという生命の循環。しかしこちらは名残の儚い蚊であり、吸い遂げることはないだろう。生物界の命の劇とも言えそうなものがさりげなく含まれる。

ベランダの手すりのくもり露微塵　　高志

朝起きの深呼吸をするためにベランダに出る。そして昨日までと手摺の手触りが違うのに気がついたのである。急に夜が冷えてきたので細かい露が発生しているのだった、との季節感を繊細に捉えた句と見た。

あの峠を越して来たのねと肩を寄せ　　昭七

長い年月を添い遂げた二人が昔日の懐かしい山旅を回想している場面、「あの峠」は今も見えているのだろうか。「肩を寄せ」とは何とも甘すぎるけれど気持には同感である。俳句としては「あの峠越して来たねと」で如何かと思うけれど、作者はきっと「句の形式よりも感情表現が大切」と仰ることであろう。

雨傘に毛虫の落つる音すなり　　みち

雨傘に落ちるのは木の雫ではなくて毛虫だった。「音したり」では一匹だけでやや驚きの感じだけれど、「すなり」では毛虫は連続して落ちてくるようであり、ああまた毛虫だな、と了解して興がっているようすさえ見えて楽しい。林に沿った雨の径をゆくのであろう。

俳窓評論纂

＊8.5毎日新聞に評注柳田国男全短歌来嶋靖生著（河出書房）の書評が載った。柳田国男は父の影響で五七五七七の和歌を習い十歳から和歌と漢詩を自然にあやつった。

つくった作品はお父さんが「竹馬余事」と題して本にした。兄の歌友の鷗外に可愛がられ『しがらみ草紙』に歌を発表した。やはり兄のすすめで松浦辰男のひきいる歌の会「萩坪しゅうへい塾」に入り、そこで生涯の友田山花袋に出会った。松浦先生の影響は強かった。死者の目をつねに感じていた。生者は死者の目に恥ずかしくないよう、清らかに生きねばならぬと説いた。柳田国男の民俗学の柱は、死者へのあつい思いである。日本人の「血液」として、先駆的にその歌作に注目したのが著者である。既に二つ著作があるが、三部作の結びとして、これまで集めた柳田の歌三百首あまりに注と解釈をほどこす。十四歳の歌「夕がらすねぐらもとむる山寺ののきにほすなり墨染のそで」はいかにもおませ。二十歳の「つはものの命にかへし勝いくさうれしとのみは思はざらん」は、日清戦争の勝利に沸く世相への批判をうたう。死んだ兵士がいるからは大喜びできない、と訴える。恋歌もある。「一目みてはや恋しきは此世なるえにしのみにはあらじとぞ思ふ」。明治の恋歌の先駆と著者は評価する。松浦先生は口や舌にのせ「調べ」よく詠めと教えた。たしかに歌は幼い日から覚えた口笛のようなもの。声で高らかに歌うもの。その実感が口で語り耳で聴く日本の詩歌や昔話といった「耳の文芸」の歴史を考える源となった。著者の書きぶりはやわらかく、歌の細部に深く突っ込まない。それが妙にここちよい。国男の淡く流れるような植物性の歌とよく似合う。（平成2年発行の「少年柳田國男」は私の隣町の利根町が作った小冊子。その中にも大まかな紹介がある。又みちさんの「読初や柳田国男の恋の歌」が本誌に投句された。先の冊子には恋の歌に、おさらばして民俗学の学問にさあ行くのだと勇ましく書いてある。）

＊朝日八月に古典百名山大澤真幸が読む、として本居宣長の「紫文要領」が載った。有名な源氏物語論である。もののあはれについて論じている。もののあはれを知ることが源氏物語の主題である。ああはれという感動の嘆息があはれの語源だ。嘆息が他人も復唱し反復することができるようにするために和歌ができた。和歌の日本語は人と物との最初の出会いの衝撃を純粋に保存している。それにたいして物語はもののあわれの内容を叙述する。人は物に触れて強く心を動かされるとそれを他人に聞いてほしくなる。そうした思いに駆られた者が物語を書く。源氏物語は物語の白眉である。多くの物語が恋や好色を中心に展開するのは、恋・好色においてはとりわけ心が大きく動くからである。不義密通のような世間が許さぬ恋であればあわれの程度はさらに深い。「紫文要領」をその総論部分に組み込んだ晩年の「源氏物語玉の小櫛」で

はさらに逆説を示唆している。あわれが最も深くなるのは、触れようとしているそれに触れ損なったとき、触れることが不可能になったとき、触れようとしていた物が喪われたときだ、という。源氏が愛した女性の多くが出家か死によって彼から去っていく。女性たちとの出会いのあわれは喪失の体験において極点に達する。宣長はまず、和歌や物語といった文芸を勧善懲悪のような教誡を目的とする書物から独立のジャンルとして確保した。その上で後年「古事記」を読むことを通じて、物のあわれを教誡的な書物の守備範囲まで拡張した。物のあわれの中に、公的秩序をもたらす政治的なポテンシャルがある、と。よき政治の原点に「真心」が、物に触れて深く動かされる心がある、という点が重要である。（小林秀雄ばかり持ち出して恐縮であるが、もののあわれを知るということは何の役にも立たないかも知れないが、これを知らなければ生きていくことはできないじゃあないか、人間らしく、と言っている。大澤真幸氏はこれをよき政治の原点にまで敷衍した所が素晴らしいと思う。）

＊9.1の書評欄：現代社会はどこに向かうか　高原の見晴らしを切り開くこと　見田宗介著　千年単位で時代を視る。地球という閉鎖系に生きる人類も例外なく、大増殖期を経て安定平衡期に向かうロジスティック曲線を辿る。近代は大増殖期に当り、現代はこの近代から未来の安定平衡期へと至る大きな変わり目にある。人類は今加速し続けて来た歴史の突然の減速を経験している。もう今予兆として物質的な富の増大ではなく、現在の生の充実を幸福の尺度とする感性が現れている。未来の目的ために現在を空疎なものとしない生き方は、自然を破壊せず、他者を手段化しない生き方とも重なる。安定平衡への転回が自ずと生ずるわけではなく、大増殖期から安定平衡期への転回を知るのは、生の充実が他の生の充実を触発する充実の連鎖反応を起こすことがその要件であろうか。この移行は少なくとも百年はかかると見る著者に対して書評を書いた早稲田の斎藤教授はその連鎖を負いきれるだろうか。千年先の社会にいまをどうつないでいくか。悠長に考えておれないという。

＊9.15朝日書評欄に東直子が薦める新刊として橋本多佳子全句集が載った。角川の文庫本になっている。「乳母車夏の怒涛をよこむきに」「いなびかり北よりすれば北をみる」等、激しさと冷静さを併せ持つ著者の独自の俳句作品に魅かれていたので、気軽に持ち運べる文庫版の全句集がとてもうれしい、とある。誓子先生の解説、詩人の小池昌代のエッセイも掲載されている。多佳子に女らしさを求めた当時の批評に対し誓子が解説で云々とその解説文を載せているのが痛快である。やはり写してみる。

「作家は人間の中から出て作家となる。その作家がたまたま女性である場合は女流作家と言われるが、その作品に女らしさがにじみ出ているとすれば、それはあくまで結果である。それは結果として待つべきで求むべきではない。男の作家に男らしさを求めたりするだろうか。あほらしい」（もう50年前になるが、みちさんとの結婚式に私はこれと同じような趣旨のスピーチをした。皆から訳の分からない大演説をしたと揶揄からかわれて、誰も理解してくれなかったと思った。ここで思い出したのでちょっと書いておく。）

＊俳句甲子園参戦記を東京の高校で貰った。それが面白かったので簡単に紹介する。高三の作品で気になった句を書いておく。母犬は死にたり花の一軒屋、氷菓食べるわずかに前を行く君も、骸なほ翼あたらし草の花、短夜やカマンベールの伸びること伸びること、蛙の目我を映して閉じにけり、滴りや鎌倉の海見えてきて、罅深き壁に聖母や秋深し、等結構難しい俳句を作っている。審査員はたくさんいるらしいが、鴇田智哉（春の夜の漫画の中に人がをり）中原道夫、神野紗希、高柳克弘（木犀や同棲二年目の畳）等である。9.20のプレパトで優勝校と競争句を放映していた。鰯雲仰臥の子規の無重力（英夫）が高校生に勝ってプレパトの大人が勝利したと夏井いつきが報告していた。（高校生の俳句作品を大人の多数決で優劣を決めてそれを見世物にしているテレビ局の営業戦略に乗せられた番組ということですね。俳句の言葉を被った短詩だと思う。季節感を持って自然を描写するという事を人生経験の少ない若者に求めても無理である。だから取合せの俳句になるんでしょうね。）

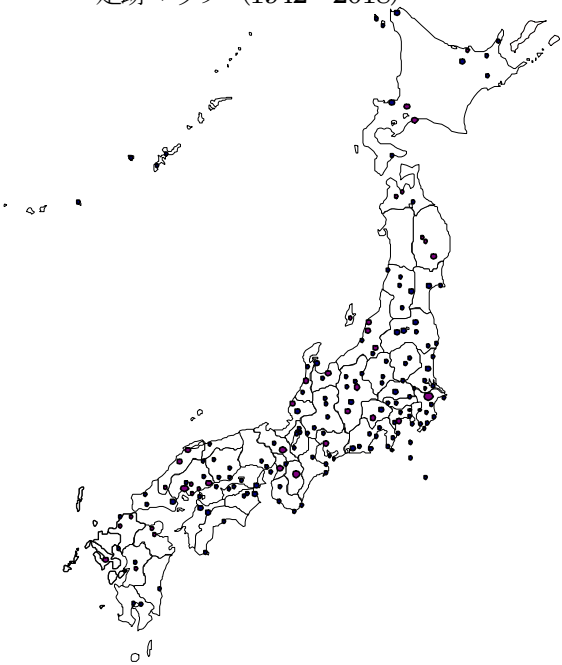
受贈誌（平成30年9月号）

初茄子水に入れれば水弾く（彩142号）　平野ひろし
ラジュウムの川に溌剌河鹿鳴く（〃）　〃
個々の影失せし寄墓直た灼くる（〃）　〃
水張田昇る朝日の光る帯（〃）　上田とし枝
金魚群る槽に小舟の水温計（〃）　佐藤恵子
岩壁に百尺観音岩煙草（〃）　平野彩和
雨催低く低く飛ぶ燕（〃）　横川　正
小米花生垣越えて枝垂れたり（〃）　三田村清子
ポーズとるヨガの「屍」青芝生（〃）　篠崎美津江
東京クラブ（8月号）
雨上る早瀬の渕の半夏生　文男
丹精の朝顔紺でありしかな　璃子
白玉や母の思い出浮き上る　栄
ぴたぴたと見沼に畦の塗られたる　理佳江
炎天を手回し電話にて嘆く　万世遊
東京クラブ（9月号）
かまつかや国分尼寺の土台跡（礎石跡）　万世遊

秋空の秩父山陵雲走る　理佳江
国分寺回廊跡を秋の蝶　万世遊
絡み合ふ牛込見附葛の花　栄
湯気の中昭和遠のくきぬかづき　璃子
刈る稲の利鎌のひゞき聞えけり　虚子
杉七月号潮主宰選
啓蟄や居座ってゐるふさぎ虫　吉羽多美子
あすか8～9月号
豆飯や杖つくことにならうとは　山尾かづひろ
金雀枝や生命線の杖一つ　〃
向日葵を十本咲かせ〈アサロン　〃
母の日や母の襁褓を替へたけれ（彩142号）　光成高志
人参の落花小麦粉紛らはし（〃）　〃
山尾かづひろ吟行ノート東京クラブ8月～9月
あんぱんのやうな雲あり終戦日　光　みち
竹山に代々住んで竹の春　光成高志
白日夢瓢の須臾に紐となり　長屋璃子
向日葵の千こちら向く古戦場　山尾かづひろ
大漁旗飾る櫓舟や浦祭　石坂晴夫
縁側の客にもてなす衣被　光　みち
捧げられ山車欠はす神輿さま　光成高志
芭蕉のかるみ以後の閑話休題（6）　光成高志

今年の二月に買った『芭蕉』（栗田勇著平成29年）を読んでいて、芭蕉に至った精神遍歴をかなり赤裸々に書いてあるので、そういう書き方もいいのかと思い、ここに私の浅はかな考えを書くのは気が引けるのであるが、論文ではないので休題にして覚え書として私も書いておく。私は栗田氏のような文学部の講義を受けたわけではない。皆本を読んで考えただけのものである。高校に入って現代国語で竹取物語に触れたのが古典に触れた最初であった。二年の春に芭蕉の奥の細道が出てきてこれに強く魅かれたのを覚えている。読めば読むほどただ心が引き込

足跡マップ（1942～2018）



まれるような感慨があって、この気持ちを恩師に伝えたくて、その授業から五十年経って同好の同窓生に声をかけて大阪で同窓会を持ち、奥の細道と源氏物語の朗読を行った。「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人也。」から「其日草加と云宿にたどり着きにけり」までは全部読んだ。俳句の所は口笛で唱歌を吹き句を読み上げる。大垣の最後はまた全部読んだ。旅立ちの芭蕉の心持が胸に応えてくるようで目頭が熱くなった。朗読中に芭蕉のリズム感が乗り移って、芭蕉の漕ぐ舟に、身を預けているような錯覚に襲われた。不思議な体験であった。源氏は百合子さんに頼んで須磨の心づくしの秋風の項を読んで貰った。彼女は該当部を巻紙に筆書きしてそれを見ての朗読であった。今思うとよくもまあ臆面もなく皆を集めて演技したものだと思う。ここに昔の受験勉強のことを書くのは恐縮であるが、一度きりのことであり、書いておく。受験の年になって国語の問題がよく解けるようになり、英訳の面白さもわかって来て、倉田百三の著作集にあらためて手を出したのは受験の年が明けてからであった。放課後の図書館に詰めて「愛と認識との出発」を齧ってこれは大学に入ってからもじっくり読まねばと思った。段々俺は国語がほんとは好きなのでないかと思いつつ言われるままに工学部に入った。国語の最後の方にブルーノタウトの桂離宮のことを書いた文章に触れたこともあって建築学科でもこういう文章が書けるのだと、かすかなこじつけでもって大学に入ったのであった。こんなことを書くと格好つけているように思われようが、その時はそのような理由付けでほんとは好きになりつゝあった文学を逸らしたのであった。高校の教科書三冊はいつかもう一度読まねばならぬと思い続け生家から住処を変える度に持ち歩いた。昭和三十七年（一九六二）の春に京都にモナリザが来るというのを知ってこれを観る序に京都奈良の古寺を拝観する計画を立て高校の同級生を誘って京都に行った。皆と別れた後は宮内庁管轄の修学院離宮・御所を観て後、主な寺社を見て回った。最後の日は唐招提寺・薬師寺・法隆寺を廻り帰省した。昨年（二〇一七）秋に三回目の法隆寺参拝をして救世観音像を拝観したのが心の区切りであった。過去を振り返って見たら、私は世俗の生活をしながらこの時の古寺巡礼の旅をずっと続けて今に至っていると思う。そういう意識の元に出張もしたし旅もした。そうだ、日本列島の地図に足跡を残した所を記した絵を作ったことがある。それをもう一度掲げよう。17年前のものにその後の旅の点を加えた。こんな図を載っけても読む人には面白くもおかしくもないのは承知しているが、とっくに終わったサラ

リーマン時代に呼ばれて行った土地の記憶も薄くなっているので敢えてここに掲載した。最近日本のどこかの地のことを夢によく見る。芭蕉のように夢は枯野をかけめぐるのではなく、人の集まりの中にゐて喋ったりしているのが多い。小学生時代の蛇に追いかけられたり、B29の空襲のような怖い夢はもう見なくなった。上京後の人生は九星術にならい、9年毎の周期で自己を振り返ってきた。4期までは回想録を残した。5期まで仕事に係わったが、6期の今は俳句生活だけになった。その期も後二年であり、次の7期は二〇二九年までである。生きておれば、私の米寿の前年である。俳句実作はこれでも44年にしかならない。でも芭蕉に触れて70年になるのだからその時までには、なんとかその心境を理解したい。軽みの心境に近づきたい。中江藤樹、田中桐江、伊藤仁斎、新井白石、果ては本居宣長などの学者と芭蕉はどこが違ったのか何故そういう学問の道に進まず俳諧に行ったのか、それは十代に決まったのだと言えばそれまでゞあるが、それを書きたくて横道に逸れてしまった。

お便り広場（到着順、敬称略）

涼しさの気もなく、立秋を過ぎました。今も雷鳴少々空はうす黒くなり、雨を期待しましたが、しょぼく雨で暑さを加速させました。お体調を心配しております。私のように名前のある病気などではなく老害保持者はヨタくの足と遠い耳に困惑しているのみでございます。白金葭七月号拝受してより日が過ぎてしまいました。小鰺刺が飛びまわる蓮池の様子も変ったのではないでしょうか。植物にも動物にも辛い夏ですがよくお出かけになったり象鼻杯を飲み干す方がいらっしゃったり、皆様熱心でいらっしゃるのに感心しております。蓮の花は好きでちゞれたりやわくしたりすることなくすっきりのたたずまいが気に入っています。お句を目で追い蓮の花を眼裏にして楽しんでおります。御誌を拝読して思うことは、吟行録・芭蕉のかるみ以後・俳窓評論纂など光成様がペンをお取りの部分が多くしかも半端に読めない文章ありで、これらのご執筆は肉体的精神的に大変なご負担と存じ上げます。書くのが好きでも（手書きオンリー）何かを調べたりしながらすると身の廻り中辞書やら歳時記やらいろくちらかり放題で、時間は立つわ台所へ立つ時間になるわでパニック寸前になります。パソコンなどお使いになるのとは違いますが、主婦業も入り何か書くにしても大きな違いはありますが、疲れることはタシカです。お体力お考えの上長い道筋ご無理なくと申し上げます。みち様とまだ続きそうな暑さをひたすらお体お大切におすごし下さいますようお願い申し上げます。ごきげんよ

う。二〇一八年八月十三日光成高志様　　長屋璃子

（美しい日本語のご丁寧な手紙を毎回いただいておりますこと感謝致します。今回は私の執筆の心身の負担をご心配頂き恐縮に存じます。みちさんの協力があるので何とかやって行けています。老眼がすすんだこと、思いついたことをすぐ打込んでおかないと忘れてしまうことなど年を取って大分鈍くなって来ましたが、心臓と相談しながらやっていますのでご安心ください。璃子さま、どうかゆっくり少しずつ書かれたらよろしいのではないでしょうか。今の今自由に思うままおやり下さいませ。高志）

光みち様　きらいな虫のあまり居ないのはこのモーレツ暑さの故でしょうか。鈴虫クン達元気とは育て方がお上手なのですね。何年か前に鈴虫を頂き胡瓜など与えて飼ってみましたが失敗し鳴声を聞くこともありませんでした。苦い思い出です。漬物を食べる消夏法、理に叶っているのでしょう。私も大きなヌカミソのカメを所有し一人で食べる材料はわずかなのに毎日天地を反したりヌカや塩を加えたり荷厄介にしつゝ止められず胡瓜ボリくしています。トンガラシ入れたり世話がやけます。夜十一時頃今日は早く寝られると思うと、ヌカミソをかき回し猫のおトイレ始末忘れないのが因果でしております。姪が来る前の電話はヌカミソ漬に何々を入れておいてと云うことで。買ったのとは味が違うとおだてられ泣く泣く買いものです。とんだヌカミソ談義になりました。お許し下さい。ヨタくく句会に行き耳は遠くなりお荷物になっていると思いつゝやめてくれるなとの声で頑張っております。みち様の若さを頒け下さいね。光成様とこの夏頑張って頂きたく心よりお願いいたします。

（8.13 盆入り璃子）

暑中お見舞い申し上げます。最近は日本列島自然災害が多く発生しております。豪雨のため中四国大変な被害が発生しています。又あとは体温を越す猛暑です。熱中症大丈夫ですか。私は元気でいます。家の方も大丈夫です。まだ暑さが続きますお大事に。

蝉しぐれ一雨欲しい大暑かな　　（7.28 健三）

暑中見舞い申し上げます。たいへんな夏を過ごしています。その後お元気ですか？年をかさねて豪雨猛暑台風と身体のほうがついていかれません。高志さんも敏子さんもがんばりやさんだからそんな事云うてはいないと思いながら私もがんばっています。家の前まで水が来て外には出られませんでした。伸明も会社に行くことが出来ませんでした。道も田んぼもわからないくらい一面海でした。私達の所はまだいい方で同じ町内で避難された方もいらっしゃいます。お体大切に無理はいけないよ。　　（7.31 幸子）

（皆高所に住んでいるので大丈夫だろうと高をくくっていました

が神辺平野は海になったのですね。古事記の頃は入海であったからでしょう。今頃お見舞い申し上げます。（高志）

前略白金葭会費半年分（30・10～31・3）同封のため今月は封書にて句稿をお送りいたします。ご夫妻におかれましてはまだまだ暑さ厳しい折柄くれぐれも健康にご留意下さい。（9.1 興正）

二枚もののカレンダーすでに二枚となりました。酷暑よさようならです。ますます老いるばかり年月は加速し俳句は後退です。みち様のおっしゃるように漬物も一人ではそんない沢山頂けませんが、何とか二〇一八年夏を乗り越えました。お心づかい嬉しいです。嬉しゆうございます。己のことのみ申し上げましたが、ますますご健吟の御事と白金葭楽しみにしております。お元気と健康両立されますようお祈りしております。（9.12 璃子）

PS：九月の作品あまりパットしない東京クラブでした。

今年の夏はかってない猛暑でした。御無沙汰で失礼いたしておりました。やっと元気が戻りお仲間に入れていたゞきたいと思います。御丁寧な御手紙ときれいな表紙の俳誌ありがとうございました。それに道順もいたゞき九月から・・二十一日のアビスタを楽しみにうかゞわせていたゞきます。どうぞよろしくお願いいたします。（9.17 素子）

拝啓ようやく秋の気配が見えて来たようです。元気にご活躍の事と拝察いたします。過日はご丁寧な吟行の件ご案内頂きましたが体調を考えて不参とさせて頂きます。お許し下さい。午後からの句会も残念ながら五句「投稿」という形で参加させて頂きたく同封しました。よろしくお願い致します。いろいろご面倒をおかけして申し訳ありません。私事ながら去月末きょうだいの中で一番親しんでいた姉を亡くしました。九十二歳でした。これできょうだいはいなくなりました。世の常とはいえやはり寂しいものです。陽気不順の折ご自愛下さい。みち様にもよろしく。（9.15 昭二）

蓮見舟あこがれ（？）今年実現してうれしゅうございました。写真代などご用意頂き恐縮です。彼岸花が見事に咲き乱れています。今年は不順な天候ながらいろいろな花の開花がいつもより早いようです・・。第4金のお誘いなるべく参加したく思います。（9.20 寛子）

前略お変わりなくお過ごしの事と存じます。過日は鏡花についての拙文入力のおすすめ恐縮しました。返答の遅れは（小生のリズムで）パソコンを開けるのがめったにないためで申し訳ありません。あれはボツにして下さい。ご返信をと思って読み返してみたところ、あんまりひどい作文なのに気づいて掲載を止めて頂きたく思った

ためです。鏡花の世界は非現実の世界、それを現実の言葉でとらえてみようなどゝいうのがすでに無意味なのかも知れないと今改めて思っているわけです。勝手なことばかり申してご免なさい。よろしくお願いいたします。折口の「古代研究」など面白く読んでいます。お身体大切に。無事に秋を迎えましょう。（9.20 昭七）

（昭七さん、折口信夫の古代研究など寄稿願いませんか。期待しています。柳田国男を継いだのは折口とか小林秀雄の講演で言っているのを知っていますので。高志）

昨日は久しぶりに拝顔し、平安王朝時代の空気ばかりかランチまで共にできて愉快でした。ＳＯＡの「源氏物語精読」は、原文の行間から王朝人の世界を同時代的に感得させてくれるのがいいです。逐語的な講義であるところも、大袈裟ながら古事記伝の宣長や古文辞学の徂徠を思わせて、並みの大学教授を超える講師の実力に感服しています。平安語の適切なガイダンスと物語世界の精緻な読み取りによって、世界最古の文学作品をオリジナルの形で現代小説のように味得できることは本当に素晴らしいですね。幾つかの源氏物語講義をこれまで受けてきましたが、手を抜かない逐語解釈の積み重ねの上に作品を解明する妙味は、ＳＯＡがとても優れています。しかもそこで「白金葭」への機縁を得られたことは、本当に幸運でありました。主宰の積極的な行動力と強靭な追求力には、いつも瞠目していますが、お互い気性が文人肌で、文藻と関心が重なるためか話がツーカーと通じる。これがじつに楽しい。滅多には巡り会えない得難い友と蔭ながら感謝しています。知的関心旺盛な勉強家ゆえ、話柄が停滞せず、その都度発展深化し、新知識に恵まれるのも嬉しい。小生常々の心願は、死ぬまでに何処まで辿り着けるかにあります。広漠たる未知の荒野に非力を省みず挑戦。あえて申せば私の「夢は枯れ野を駆け巡る」です。高志さんと伴走しつつ、その本懐を空しい妄執とせず些かなりとも達成したいと願っています。（9.21 健二）

酷暑が去ったと思ったら今度は秋霖続きですね。散歩も出来ないで居ります。雨が止んだら東大博物館の昆虫展に行きたいところです。今週末で僕も漸く88歳になります。それではお元気で（9.26 陽一）

我孫子日記

*	7/20 例会（蓮見舟）
*2	7/21～7/27 パソコン入院
	7/31 野田源氏
*3	8/3～8/11 冷房機寿命にて外泊
*4	8/15 川越
*5	8/19 日本民藝館
	8/20 中川素子さんより電話
*6	8/21 北総病院
*7	9/15 文化祭
*8	9/18 北総病院
	9/19 SOA
	9/21 例会

*川鵜さやう杭の天辺ゝゝと

カヌーゆく手を振って又漕いでゆく
*2 ヨガ帰り車中の熱気殺気立つ
夜もすがら鈴虫鳴く声夢の間に
*3 銚子屋へ入る目印夾竹桃
朝顔の花壇の廻る亀有駅
大利根や夏鶯の鳴く朝
灸花素泊まり宿に朝がくる（みち）
寄墓に桔梗御前や蝉時雨　（〃）
*4 駅を出て案山子が並ぶ指扇
*5 大水瓶蓮の浮葉をびっしりと
民芸館大水鉢に目高飼ふ
大壺の底など知らず目高浮く（みち）
*6 北総の谷津田黄金に稲稔る
*7 文化祭鯛焼売場も雨の中（みち）
青春の顔して大喜利文化祭（〃）
*8 白雲の空より懸る葛の花
大病院大王松の落葉かな
秋彼岸無念無想でバスを待つ

編集後記

振替休日の日の良寛・国上寺全国俳句大会に行って来ました。中原道夫さんに興正さん陽一さんのことを話しておきました。その廻りの人々にも刺を通じました。特に、木戸敦子さんの会社を訪問して印刷マシンと製本所まで見させて貰いました。雨の中をバス停まで送ってもらい有難うございました。大会の様子などは省略しますが、久し振りに他結社の句会に出て又、中原道夫さんの流暢な選評を聞いて思うところがありましたが、次回まであたためてその時に書ければ書くことにいたします。

今月の一番感動したことは健二さんのメールでありました。閑話休題（6）に書きましたように私のここに来て生きる目標が全くおんなじであることです。そういう男の人に出会えるとは思わなかったのでこれはうれしい事です。高原にあって星の煌く広漠たる青空（せいくう）を見る思いとはこういう時のことでしょう。自分がどういうところまで行くのかそれが楽しみです。

白金霞九月号（通巻第九〇号）平成三十年九月二十六日発行
編集・発行人　光成高志　発行所　二七〇-一一一九　我孫子市南新木二-二四-一七
表紙の題字：加納綾女　同写真は平成三〇年九月一日の白金霞